

《2021 年 1 月（通算 291 回）月例会報告》

第 5 回 U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップを振り返って —「with コロナ」の新たな様式とは—

【日 時】2021 年 1 月 28 日（木）19:00～21:00（終了後、23:30 までオンライン懇親会）

【会 場】オンライン（Zoom）

【テーマ】第 5 回 U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップを振り返って—「with コロナ」の新たな様式とは

【演 者】中塚義実（NPO サロン理事長／筑波大学附属高校）

本多克己（NPO サロン副理事長／NPO 神戸アスリートタウンクラブ理事長）

田島璃子（NPO サロン事務局／早稲田大学 1 年）

【参加者（会員・メンバー）12 名】 注 ★は NPO 会員

★安藤裕一、★金子正彦、★岸卓巨、小池靖、★嶋崎雅規、★関秀忠、田島璃子、徳田仁、★中塚義実、
野村忠明、★本多克己、本郷由希

【参加者（未会員）5 名】

荒川浩幸（北海道）、磯和明（東京）、小曾根潮（京都）、埴田直文（兵庫）、橘和徳（富山）

【月例会報告】本多克己、田島璃子、中塚義実

【目次】

はじめに

I. 第 5 回 U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ概要（本多克己）

II. 主催者として感じ、考え、取り組んだこと（中塚義実）

III. 動画配信プロジェクトについて（田島璃子）

はじめに 注) 月例会案内より転載

toto の助成を受け NPO サロンが主催する標記大会が、1 月 9 日～10 日、長野県千曲市で開かれました。16 チームのノックアウト方式で行われ、ペスカドーラ町田が ZOTT WASEDA との東京対決を制して初優勝。「U-18 フットサル 20 周年」の東京都に初栄冠をもたらしました。

緊急事態宣言下で開催すべきかについては最後まで悩みましたが、長野の方々とは何度も協議し、＜大会に携わるすべての人が「with コロナ」の新たな様式を理解し実践する＞ことを徹底して開催することとしました。with コロナの「新たな様式」が高校生にどこまで徹底できるかが課題でしたが、参加チームの意識は高く、ほぼ達成できたと思います。

今回は zoom を用いた試合映像のライブ配信にも取り組みました。会場に来られない保護者やチームメートがリモートで応援できるような仕組みです。これも「新たな様式」の一つです。

緊急事態宣言だけでなく大雪の影響もありました。さまざまなトラブルを乗り越え、最後まで実施できたのは地元長野県の方々のご尽力と、「大会に携わるすべての人」の思いが繋がった証だと思います。ありがとうございました。

月例会では担当理事の本多克己と理事長の中塚義実が大会全体を振り返り、参加チームからも大会の印象や各地のリーグ状況についてコメントをいただく予定です。動画配信についてはサロンの新戦力・田島璃子が報告します。「新たな様式」を共有する機会にできればと思います。

多くの方のご参加をお待ちしています。

I. 第 5 回 U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ概要 (本多克己)

会 場

大会会場はことぶきアリーナ千曲（長野県千曲市）
昨年は、前年10月の台風19号で千曲川の決壊があったが、体育館は無事だった。
今年は、正月明けの土日＝1月9日（土）、10日（日）に開催。



地域のサポート

長野県千曲市での開催は今年で3年目。
地域のか強いサポートに大会は支えられている。



主管 長野県フットサル連盟
後援 長野県、長野県教育委員会
千曲市
一般社団法人信州千曲観光局
一般社団法人長野県サッカー協会
戸倉上山田温泉旅館組合連合会

筑北スポーツクラブ、ポアルース長野などの
高校生もボランティアとして参加。

大会会場は一昨年の豪雨で千曲川が決壊し大きな被害を受けた千曲市の「ことぶきアリーナ千曲」です。幸い、アリーナには被害はなく、無事に開催できましたが、今年はコロナの影響下での厳しい状況での開催となりました。

正月明けの長野開催、というのが U-18 フットサルのカレンダーのなかでも定着してきたように感じています。今年で3年目となり、サッカー協会、フットサル連盟のほか、県、市、そして地域の観光局や宿泊施設との連携も年々強化されていることも大会の価値を高めていると思います。

資金面では、スポーツ振興くじ、いわゆる toto の助成を毎年受けており、今年も 96 万円の助成が決定しています。

ただ、今年はコロナの影響もあり、例年協賛していただいている多摩大学、加茂商事、ジャパン・スポーツ・プロモーションの協賛をいただくことはできませんでした。

大会要項

コロナ禍のなかでの大会のあるべき姿を模索、検討、議論し、8回の改訂を行う。

＜大会要項改訂履歴＞

1. 10月5日（初稿）
2. 10月15日（関係者にメールで配信）
3. 11月10日（理事会での承認）
4. 11月27日（改訂版として関係者に配信）
5. 12月12日（長野でのミーティング）
6. 12月13日（公開シンポジウム）
7. 12月15日
8. 12月20日（確定稿）



大会要項（抜粋）

- ＜参加チーム＞ (1) 地域または都道府県のフットサル連盟が主催、主管または後援して開催される2020年度のU-18フットサルリーグの優勝チーム。
ただし本年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を考慮し、優勝チーム以外のチームを、単独チーム、選抜チームを問わず、リーグにて選出することを認める。
(2) 出場チームが16チームに満たない場合は、当該年度のリーグ参加チーム数の多いリーグから順にチームを選出し、16チームでの開催とする。
(注) ただし、やむを得ない理由により16チーム未満での開催となることがある。
- ＜大会形式＞ 16チームによるノックアウト方式で行う。1回戦・準々決勝敗者による交流戦を行う。
- ＜参加申込＞ 1チームあたり26名（役員6名、選手20名）を上限とし、選手は選出元のリーグに登録していること。
※無観客とするため、スタッフ、保護者などが来場の場合も26名枠を厳守。
- ＜参加料＞ 1チームあたり40,000円

感染症対策（抜粋）

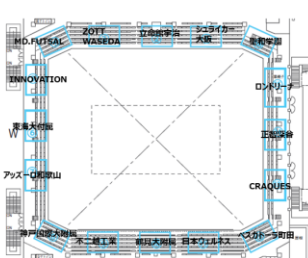
- 参加チームは過去14日間のチーム全員の健康状態をまとめた「健康チェックシート」を全員から回収し保管する。シート記載の内容を集約した「提出用健康チェックリスト」を作成し1日目会場到着時に受付へ提出すること。全員の検温（非接触型検温計）を実施する。2日目以降は入館時に検温を実施する。
- セレモニーは実施しない（試合前後の選手・審判員との握手、ベンチへの挨拶）。
- 水のボトルを共有しないこと（個人のスクイズボトルまたはペットボトルを準備）。
- 水、水を溜めたクーラーボックスを使用しないこと。
- タオルを共有しないこと。
- 原則、倒れた選手に手を貸さない（負傷の場合は除く）。
- ピッチ上でチームメイト、審判員と会話する際にも互いに十分な距離をとること。
- MCMでのユニフォーム、ピブスの提示は写真とする。
- ベンチ内で使用する交代選手用ピブスは、各個人用とすること。試合に登録する選手人数分のピブス（異なる色を認める）を準備すること。
- ハイタッチ、抱擁を行わないこと。
- ロッカールームは使用せずスタンド等で着替えを行う。
- ベンチの椅子は1m以上間隔を空け、2列に18脚設置し試合中の共有をしない。
- 試合終了毎にチームにてベンチの消毒を行う。ハーフタイムでのベンチの交代、移動は行わない。

も設定して、入れ替えの際にも密や接触を避けることとしました。

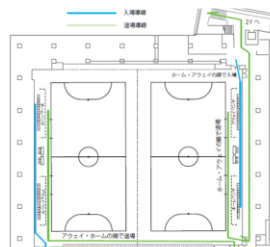
実施にあたっては、関係者や市民の皆さまからの厳しい意見はほとんどありませんでしたが、会場に並んだ関東ナンバーのバスを観光地域の方からは、会場あてに怪しからんというご意見があったとのことでした。

感染症対策（抜粋）

＜選手待機・着替え場所＞

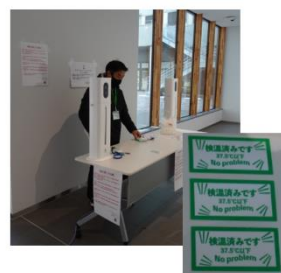


＜入退場導線＞



感染症対策（抜粋）

＜入場時体温チェック＞



＜駐車場＞



関東などのナンバーのバスを見かけた近隣住民からは、厳しいご意見も。

大会当日 1月9日

1月7日に発令された「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」(実施は8日から)に加え、8日からの大寒波のなかでの開催となった。当日朝に、武水別神社(たけみずわけじんじゃ)に成功祈願。



大会当日は、昨年につづき、武水別神社への成功祈願から始まりました。北信越地方は35年ぶりという規模の大雪に見舞われましたが、見事な晴天のもとでの参拝となりました。

雪の影響で、不二越工業が不戦敗となってしまいました。本日の月例会あてに上島さんからのメッセージが届いているので、ご紹介しておきます。

大寒波の影響

35年ぶりの大雪で第1試合に間に合わず

今大会では大雪による渋滞の影響で試合に間に合わず、対戦相手の皆さま、大会関係者の皆さまに多大なるご迷惑をおかけし、まことに申し訳ございませんでした。

今回のU-18フットサルリーグチャンピオンズカップでは**本校の出場が第1試合**だったため、前泊して準備しようと考えていたのですが、全国的にも、富山県内でもコロナウイルス感染が増え始めていた時期であったため**学校との話し合いの結果、なるべく最小限の宿泊数で行ってほしいと指示があり当日出発**となりました。この決定の時点で大会前後は大雪になるとの予報を聞いてはいましたが、まさかこのタイミングで「**35年ぶりの大雪**」に見舞われるとは想定していませんでした。

しかし、出発予定日の前日1月8日から北陸では大雪となり、みるみる腰まで雪が積もり始め、高速道路で1000台を超える立ち往生、閉鎖のニュースが流れました。生まれて初めての経験に焦り出発予定を当初の19日午前5時30分から3時間繰り上げ、午前2時30分出発にしようとした。至急選手や保護者に連絡し、出発時間に選手は全員到着したのですが、まさかのコーチがいませんでした。**コーチは車がスタックし、数時間渋滞にハマりどうにも動けなくなり欠席**。コーチの到着を待ちきれず3時過ぎに出発したのですが試合時間に間に合うことができませんでした。**通常片道2時間半で到着する道のりですが、行きの移動時間は8時間、帰りは12時間かかりました。**

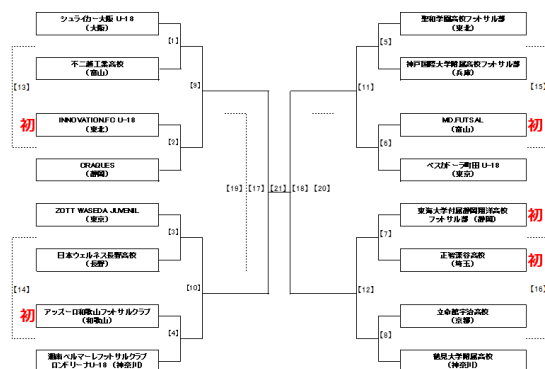
試合に間に合わず棄権となり、寝ずに準備をしてきた選手たちはバスの中でたいへん落胆していましたが、本部のお気遣いにより**当日練習試合をさせていただく**こととなり、選手の目にやる気がよみがえりホッとしたと同時に、本部の方への感謝の気持ちでいっぱいでした。

翌日の公式戦では**本校サッカー部にとって初となる全国大会勝利**をかちとることができ、学校関係者からも多大な評価を受け、生徒の自信につながりました。今回は人生初の大雪、そして初の遅刻による棄権、全国初勝利、(人生初の雪の中でのトイレ...)など初めて尽くしの体験となりました。来年も参加できるように練習に励みます。

不二越工業高校サッカー部 上島 賢秀

出場チーム・組合せ

- 16チーム中、初出場は5チーム
- 5大会連続出場は、日本ウェルネス高校(長野)のみ
- 宮城※、和歌山リーグから初参加
※昨年は「東北リーグ」から聖和学園が出場。今年は「宮城リーグ」にして参加。



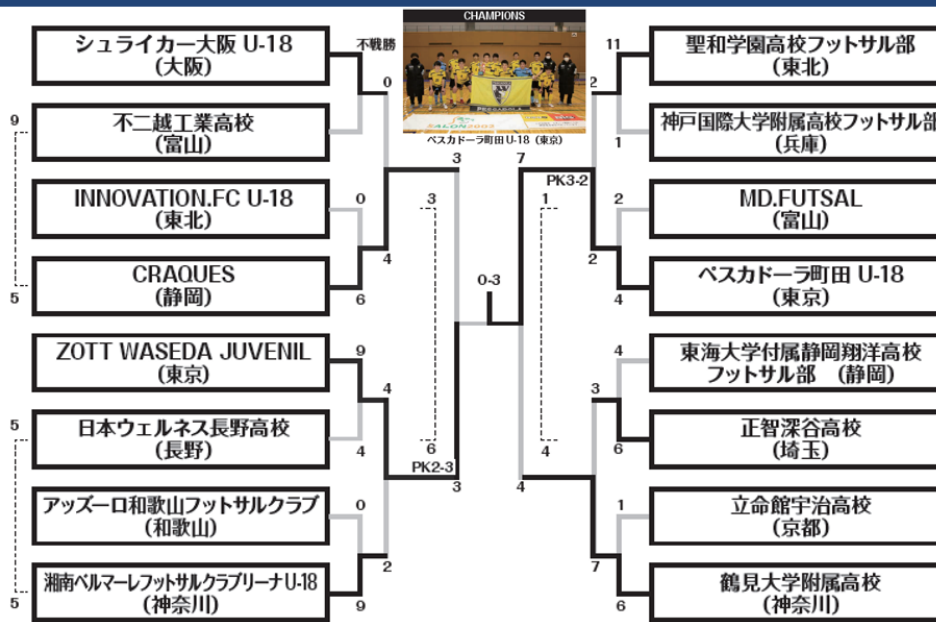
出場16チーム中、初出場は5チームで、5大会連続出場は、日本ウェルネス高校のみでした。

また宮城、和歌山から初めて参加がありました。聖和学園は昨年は東北リーグからの出場でしたが、今年から宮城リーグが新しく立ち上がりました。

リーグ参加チーム数の多い東京、神奈川、富山からは2チームが参加しています。富山からは福井県の

MD.FUTSAL が参加です。リーグ戦が行われていない福井県から富山県のリーグに参加して出場権を獲得したチームで、こうした柔軟な動きがまだまだ発展途上のU-18フットサルの推進力となっているように感じます。

大会結果



得点王 賀川浩賞



得点ランキング

順位	選手名	所属	得点
1	渡部 朝登	鶴見大学附属高校	6
2	亀田 航正	正智深谷高校	4
2	成田 美光	ベスカドーラ町田 U-18	4
4	山田 葵琉	CRAQUES U-18	3
4	織田 遥希	CRAQUES U-18	3
4	若林 勇太	聖和学園高校フットサル部	3
4	高橋 大樹	湘南ベルマーレ FC ロンドリーナ U-18	3
4	嶋原 直希	ZOTT WASEDA JUVENIL	3
4	草野 大空	聖和学園高校フットサル部	3
4	松野 洸佑	ベスカドーラ町田 U-18	3
4	本田 遥大	湘南ベルマーレ FC ロンドリーナ U-18	3
4	二瓶 京介	ZOTT WASEDA JUVENIL	3
4	大澤 寛治	ZOTT WASEDA JUVENIL	3

チームとのコミュニケーション google formsの活用

【映像配信・写真撮影 承諾フォーム】U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ

当大会では新型コロナウイルス感染拡大のため、入場を登録選手、役員のみ限定しています。チーム関係者、保護者の皆さまなどに試合風景をご提供するため、主催者の特定非営利活動法人サロン2002では、ZOOMを使用した試合映像（以下、映像）の配信を行います。また試合写真およびチーム集合写真（以下、写真）を撮影します。

配信・撮影に承認いただける場合は、以下の承諾フォームへのご登録をお願いします。登録いただけない場合は、チームの試合映像配信を行うことができませんので、よろしくお願いいたします。

※回線などの都合により配信が遅延することがあることをご了承ください。
※2021年1月6日までにご登録をお願いします。

【映像配信について】

1. 全試合の映像配信を行います。
2. 事前にチーム、主催者を通して視聴希望を受け付けます。対象は、チーム関係者、サロン2002関係者に限定します。（事前登録のない場合は、視聴いただくことができません）
3. 映像は上記の配信以外に使用、公開いたしません。
4. プライバシー保護のため、映像へ氏名の掲載はいたしません。
5. 映像は録画、転用禁止とします。

【写真について】

1. 写真は、主催者の広報活動以外には使用致しません。
2. 本承諾フォームの適応範囲には、弊社公式のインターネット媒体（ホームページ、ブログ、Facebook ページ、各種 SNS、Twitter 等）、及び外部メディア（新聞、テレビ、雑誌等）が含まれます。
3. 写真の使用期限はありません。

お問合せ先（感染対策責任者：本多）
U18salon2002@gmail.com

これまでの4回の大会では、不思議なことにU-18フットサルの先進地域である東京、神奈川の優勝がありませんでした。それは各地域に好チームが育っているという点ではうれしいことでしたが、今年の決勝はベスカドーラ 対 ZOTT WASEDA という東京勢対決となり、横綱対決という感あるクオリティの高いフットサルを観ることができました。例年と比較しても、大量得点差の試合も少なくなっており、この世代の全国的なレベルアップが実感できる大会でもありました。

得点王は、鶴見大附属高校の渡部くんが受賞し、サロン2002最年長会員の賀川浩さんの名前が冠されたトロフィーを授与されました。

大会にむけては、何度も何度もチームとの情報交換を繰り返しました。各チームからの意見や確認事項の集約にはgoogle formが大いに役立ちました。チーム登録から、映像配信の承諾、バスの利用、大会後の報告まで、すべてのチームがすばやく対応してくれたことで大会を滞りなく実施することができました。

【バス利用について】U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ

大会当日に会場にバスを駐車するチームは以下のフォームより事前連絡をお願いします。
登録期日：2021年1月6日（水）

お問合せ先（本多）
U18salon2002@gmail.com

【最終確認】U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ

各チームが参加できるかを改めてご確認のうえ、ご連絡ください。
出場チームは、それぞれ退出母体となるリーグがあります。まずはリーグ責任者に対して「このような状況下であるが参加してよいのか」をご確認ください。加えて、退出母体となるリーグは「地域または都道府県のフットサル連盟が主催、主管または後援して開催される（大会要項より）」ものですので、連盟の責任者にも改めてご確認ください。

確認していただいた結果を以下のフォームにてご連絡ください。
お忙しいところ恐れ入りますが、1月7日（木）12時までに回答いただけないでしょうか。
よろしくお願いいたします。

お問合せ先（本多）
U18salon2002@gmail.com
090-3860-7152

【報告書原稿】U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ

大会報告書を作成するにあたり、以下の原稿をお送りください。1月20日（水）までにフォームから送信をお願いします。完成した報告書はチームに郵送させていただきます。
いずれも400字以内として、リーグの重取表などがある場合は、メール（u18salon2002@gmail.com）で送信してください。

- 1) 本年度のリーグの状況
原稿作成はリーグ責任者などに依頼していただいても結構です。2チーム出場の東京、神奈川、静岡は両チームで相談していずれか1チームが提出してください。
- 2) 本年度のチームの状況
全チームが提出してください。

【大会後報告】U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ

各チームの感染対策責任者は、競技会終了7日後（1月17日）に運営担当の感染対策責任者（本多：u18salon2002@gmail.com）へ以下のフォームによって、具合の悪い選手・スタッフがいなかったか報告すること。競技会関係者も同様に報告を行う。万が一、参加チームまたは競技会関係者の中から競技会終了後7日以内に新型コロナウイルスへの感染者が判明した場合は、保健所の指示に従うとともに、長野県フットサル連盟の感染対策責任者にその旨を報告すること。

お問合せ先（感染対策責任者：本多）
U18salon2002@gmail.com

大会会場では、ほんとうにたくさんの方から、「ありがとう」という言葉をいただき、55年間の人生で一番感謝された2日間となりました。大会報告書の編集後記に記したメッセージでこの発表を終えたいと思います。

「たいへん難しい判断でした」とこの報告書の挨拶がはじまっているとおり、コロナ禍のなかでやってもいいのか、できるのか、さらには、なぜこの大会を開催するのかといった事業の本質にまで立ち返って議論と自問を重ねました。そして大会当日、かけがえのない舞台上でプレーする選手たちをみて、やってよかったのだろう、とようやく実感することができました。会場では多くの人からお礼の言葉をいただきました。立场上、私たちがその言葉を受けることになりましたが、改めて、大会にかかわったすべての皆さんに、お礼をお伝えしたいと思います。本当に、ありがとうございました。さいごに、大会の1週間後には、全チームから「選手、関係者に発症なし」の報告があったことを記して大会報告とします。

II. 主催者として感じ、考え、取り組んだこと（中塚義実）

1. 開催に至るまでの経緯

1) 実施要項確定・配信（11/27）

NPO サロン理事会での審議を経て、大会の実施要項が確定したのが11月末のことでした。できるかできないか、できる場合はどのような対策を講じるのか。想像力を働かせながら実施要項に落とし込む作業はなかなか難しいものでした。16チームのノックアウト方式（敗者同士の交流試合あり）でチャンピオンを決すること、単独チームでの参加が困難な場合は「リーグに出場した選手による選抜チーム」の出場も

第5回U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ

■11月27日（金）

長野FA 村山氏「現状がギリギリのレベルであると考え、これ以上の感染レベルが上がる場合は1ヶ月前が検討レベル」

■12月12日（土）15:00～17:30

信州千曲観光局にてMTG（対面）

→ GOTO利用で地域経済活性化「羽衣」→ ホテルプラトン

■12月13日（日）10:00～12:00

公開シンポジウム

■12月16日（水）19:30～21:00

TFAフットサル委員会 コロナ対策MTG

■12月26日（土）17:30～18:30

NPOサロン 映像配信スタッフMTG

■12月29日（火）14:00～15:30

長野FF菅原氏・土屋氏とMTG

■12月30日（水）14:00～16:00 NPOサロン映像配信スタッフMTG

■2021年1月4日（月）19:00～20:30 代表者会議

■12月5日 研究大会

■12月6日

日本部活動学会研究集会

■12月13日

公開シンポジウム

■12月26～27日

ケーベルタン-嘉納YF2020

認める形としました（実際はそのようなチームは出てこなかった）。

この段階で首都圏だけでなく、開催地長野県においても感染者数が増えはじめ、第三波の襲来が現実のものとなりつつありました。長野県サッカー協会フットサル委員長の村山吉朗氏とは電話等で連絡を取り合いましたが、「現状がギリギリのレベルであると考えるべきで、これ以上の感染レベルが上がる場合は1か月前に判断する必要がある」とのご意見でした。出場するチーム・選手・スタッフだけでなく、運営側、そして地元での受け入れ側（体育館や旅館組合など）の状況も考慮する必要があることを改めて感じました。

2) 千曲市訪問と打ち合わせ (12/12~13)

例年は11月初旬に現地へ赴き、挨拶かたがた視察と打ち合わせの場を設けていましたが、コロナの影響もあり延び延びになっていました。しかし年内には顔合わせが必要です。ちょうど12月13日に公開シンポジウムを予定していたので、そのタイミングで訪問することにしました。

12月12日の午後、神戸から本多克己、東京から中塚義実が信州千曲観光局に出向き、同専務理事の小沼浩栄氏と対面しました。コロナ禍で観光客が激減した地元はこの大会の開催を心待ちにしており、万全の態勢で受け入れ準備を整えているとのことでした。しかし無理はできません。そのことも共有しました。

長野県フットサル連盟理事長の菅原基信氏、筑北サッカークラブの土屋好史氏も合流し、競技運営面、とくに感染予防対策について詳細な打ち合わせができました。長野県フットサル連盟では3月に「長野オープン」を毎年行っており、そこにつながる運営を目指してこの大会でも万全の態勢で臨む準備を進めています。中塚は東京都サッカー協会フットサル委員会や東京都高体連サッカー専門部で用いられる感染対策ガイドラインを持参し、すり合わせをしました。緊張感をもってこれらの話ができただけはよかったことです。

打ち合わせ後、本多と中塚は「GOTO イート」の割引券を用いて千曲市内の「羽衣」というお店に出かけ、地域経済にも貢献(?)しました。ご家族で経営される小料理屋で、感染対策は十分為され、あたたかいおもてなしを受けました。宿舎のホテルプラトンの温泉は毎回秀逸です。

12月13日の公開シンポジウムの第1部「イベントを中心に」は、前日に続いて信州千曲環境局から配信しました。小沼氏もゲストとして参加し、本多氏が紹介するU-18フットサルリーグチャンピオンズカップを地元がどのように受け止めているのかについてコメントをいただきました。

3) 悪化する感染状況と「新たな様式」の模索

年末に向かう中で、状況は徐々に悪化していきます。実施の方向で準備を進めてはいますが、各方面と連絡をとりながらどう判断すべきかを思索していました。

身の回りで12月にさまざまな行事が重なっており、それらと並行しながらの準備です。12月5日に勤務校の研究大会で保健体育科の取り組みを発表し、翌12月6日には日本部活動学会研究集会でコロナ禍における部活動を取り上げ、翌週12月13日は公開シンポジウム、さらに12月26~27日にはクーベルタン-嘉納ユースフォーラム2020が控えています。さらに同時進行で、1月中旬にはじまる東京都サッカー協会（TFA）フットサル委員会主催「第20回東京都ユース（U-15,U-18）フットサルフェスティバル」についても、開催するための感染予防対策の議論を進めていました。12月16日の夜に各カテゴリーの担当者によるオンラインミーティングを開き、「緊急事態宣言が出ない限り、実施の方向で準備を進める」ことが確認されました。こうした議論が、判断の際に大いに参考になりました。（注：TFA主催大会は、緊急事態宣言が出されたため中止となった）

すでに無観客開催ということは伝えていますが、しかし今年度唯一のU-18年代の全国規模の大会です。観戦・応援したい保護者や仲間は大量にいることでしょう。そのニーズに応えるために、動画を配信できないかと、NPOサロンの関係者で話を進めていました。12月26日の夜にはその1回目のミーティングが開かれ、30日に再度打ち合わせをして細部を詰めていくこととなりました。

ごあいさつ

「withコロナ」の新たな様式を求めて

世界的なパンデミックが続きます。日本列島も「新型コロナ」の第3波に見舞われ、GOTO事業は一時停止し、年末年始は移動を控え静かに過ごすことが求められています。このような中で、第5回U-18フットサルリーグチャンピオンズカップが開かれようとしています。

開催すべきか否かについては、地元長野県の方々や全国各地のリーグ関係者、他種目や学校の関係者ほかさまざまな方と意見交換してまいりました。主催者としては、「できる可能性があるのなら、とことんそれをやりきろう！」と考え、開催の方向で準備を進めております。

ただし、大会に携わるすべての人が「withコロナ」の新たな様式を理解し実践する>ことが条件となります。先に結論ありきではありません。スポーツを通してのゆたかなくらしづくりを「志」に掲げる主催団体・NPO法人サロン2002は、「生きる」だけでなくてもよいが、「よりよく生きる」には欠かせない文化としてスポーツやアートをとらえています。そして、「生きる」ためにこれらの文化的な活動が制限されるのはやむを得ないと考えています。まず守るべきは「いのち」であり、大会に関わるすべての人の「健康と安全」です。「大会がなくなると選手がかわいそう」や「どうしても出場したい」気持ちばかりですが、その前に「どうすればコロナ禍でできるか」ととことん突き詰め、実践していく姿勢を求めます。すべての人の方向性が一致したとき、はじめてこの大会が成立するのです。厳しいですが、そこを乗り越えなくてはなりません。乗り越えた先に多くの方の理解や賛同が得られ、「スポーツのチカラをカタチに」できると信じています。

競技会の運営面はもちろん、宿泊についても地元旅館組合で万全の対策を講じてもらっています。もちろん感染予防対策は大会期間中だけではなく、日常から始まり、日常の延長上に大会があり、そこで得たものが日常に生かされます。参加者自身がこの大会の担い手なのです。

無観客試合はいつもと異なる風景となるでしょう。応援したい方にはリモートで楽しんでいただけるよう、主催者側で動画配信サービスに取り組みます。新たな様式の一つです。個人情報保護の観点から限定公開の形になりますが、趣旨をご理解の上、サービスを活用していただければと思います。従来から掲げる二つのねらいーU-18年代のレベルアップと日常的なリーグ環境の整備ーに加え、昨年度の大会では「スポーツのチカラをカタチに」のスローガンを掲げました。洪水被害に見舞われた地元の方々に、少しでも勇気や喜びを提供できるものであってほしいとの願いを込めたものです。

今回も「スポーツのチカラをカタチに」を改めて掲げます。すべての人が「やってよかった」と思える大会となるよう、力を合わせて作り上げましょう！

令和2年12月30日
特定非営利活動法人サロン2002
理事長 中塚 義実

緊急事態宣言発令見込みを受けて1月4日)

1)「緊急事態宣言」ではあるが、

地域的にも業種的にも限定的なものとなる見込みである

スポーツ(ここではフットサル)がNGということではない。

よって、引き続き感染予防対策を徹底し、開催準備を進める。

2) 当該地域からの移動がネックとなる可能性はある

(出場を見合わせるどころが出てくるかも)

よって、チーム数が減る可能性がある。

それにより大会形式が変わる可能性もゼロではない。

1月6日(水)夕方までに、改めてその時点での判断をお伝えする。

3) 最悪の場合、中止もありうる。

大会期間中に中止となる可能性もある。

<大会に携わるすべての人が「withコロナ」の新たな様式を理解し実践する>ことが条件である。

今日の代表者会議は、すべての関係者のベクトル合わせの意味を持つ重要な会議である。

1月4日に代表者会議があるので、年内に詳細を確認する必要があります。12月29日に長野県の方々とオンラインMTGをして細部を詰めました。

12月30日には出場チーム代表者宛に大会概要(代表者会議資料)を配布。主催者挨拶(左スライド)では<「withコロナ」の新たな様式を求めて>と題して思いを述べました。

4) 緊急事態宣言と代表者会議

三が日が明けた1月4日、菅義偉首相の年頭記者会見において

「緊急事態宣言発令見込み」が述べられます。いよいよです。

同日19時からの代表者会議に備え、こちらでも考え方を整理しておく必要があります。長野県の方々とともに電話やメールでやり取りしながら、大会に携わるすべての人が「withコロナ」の新たな様式を理解し実践する>ことが条件であることを再確認し、代表者会議はすべての関係者のベクトル合わせの意味を持つ重要な会議であることを共有しました。

代表者会議ではこの考えを冒頭に述べ、また年末に送信してあった「ごあいさつ」(左スライド)を用いて前提となる考えを共有しました。出場チーム自らが「withコロナ」の大会の担い手であるという意識が不可欠です。また、代表者間で共有するだけでなく、すべてのプレーヤーにこの思いを伝える必要があります。代表者会議では最後にそのところを強調しました。

緊急事態宣言がどのような形で発令され、どの範囲に及ぶのかに

についてはまだわかりません。1月6日に改めて、その時点での判断をお伝えすることにして代表者会議を終えました。

5) 1月6日と7日の動き

緊急事態宣言は1月7日に発令されますが、なかみについてはその前から徐々に明らかになってきました。こちらが想定していた内容です。あとはそれを各チームとその選出母体がどう受け止めるかです。

1月6日の関係者 MTG（主催者側の中塚・本多と主管側の菅原・土屋）を経て、各チームには、主催者の考えとして「現時点では予定通り開催する」ことを伝えました。同時に、大会への参加について、各チームの選出母体となるリーグ責任者

と、当該地域の連盟・協会に確認してもらいたいとのリクエストを出しました。ただ単に「出たいから」「出させてあげたいから」ではありません。すべての関係者に気持ちよく送り出してもらうことが不可欠です。

1月7日には全チームから回答が得られ、すべてのチームの参加問題がクリアされました。この時点で、当初の計画通り大会を実施することが決まり、動画配信スタッフの割り振りがはじまりました。時間がない中で、NPO サロンの会員・メンバーに協力してもらえたのはありがたいところです。

2. 大会の実際

1) 大雪の影響

1月8日の大会前日、本多はじめ数名のスタッフが現地入りします。中塚は本務の都合で一日遅れの参加です。

ここで別の問題が発生しました。北陸地方の大雪です。富山から動画撮影スタッフとして参加の橋和徳氏は、市内を抜けるだけで数時間費やし、ルートを北陸道から岐阜まわりに変更して何とか深夜0時ごろ宿に到着しました。そして大会初日の第一試合、富山県から参加の不二越工業高校が大雪に行く手を阻まれ間に合わず、不戦敗となるアクシデントで大会が始まりました。コロナ禍で前泊が学校から認められず、当日は朝5時に富山発の予定を3時発に前倒ししたにもかかわらず、千曲市に着いたのは11時。キックオフの10時には間に合いませんでした。幸い初日の全試合終了後、運営サポートをしてくれていた地元クラブとの練習試合が実現し、双方にとって良い経験となりました。

2) 動画配信

新たな様式として試みた動画配信ですが、会場のwifi環境の影響で思うような画像を配信することができません。それでも試行錯誤しながら、2面あるピッチをそれぞれ逆側から撮影し、2試合同時に試合動画をライブで配信できたことは大きな成果です。詳細は田島璃子氏、橋和徳氏の報告にある通りです。限られた時間、設備の中でできるベストの取り組みだったと思います。

3) 万全の感染予防対策

1月6日（水）13:00~14:00 関係者MTG

1. 大会の開催について(主催者の判断)

現時点では「予定通り開催」します。ただし、緊急事態宣言の対象地域(見込み)で都府県のみならず、開催地・長野県内の感染拡大が続いており、予断を許さない状況にあります。明日(1月7日)の午前中に、何らかの判断が長野県から示される見込みです。それを受けて明日15時より運営側でオンライン会議を開き、最終的な判断をさせていただきます(延期の可能性も探りましたが「無理」と判断しました)。

2. 大会への参加について(各チームへの依頼)

各チームが参加できるか否かを改めてご確認のうえ、ご連絡ください。出場チームは、それぞれ選出母体となるリーグがあります。まずはリーグ責任者に対して「このような状況下で参加してよいか」をご確認ください。加えて、選出母体となるリーグは「地域または都府県のフットサル連盟が主催、主管または後援して開催される(大会要項より)」ものです。連盟の責任者にも改めてご確認ください。確認していただいた結果を事務局までご連絡ください。お忙しいところ恐れ入りますが1月7日(木)12時までに回答いただけないでしょうか。よろしくお願いいたします。

補足: 感染予防対策の徹底について

すでに代表者会議で申し上げた通り、最大限の感染予防対策をします。主催者側が徹底することはもちろんですが、改めて各チームにおいても徹底してください。

とくに注意していただきたいのが「移動」と「食事」場面です。

すべての選手・役員が同じベクトルで臨めるよう、よろしくお願いいたします。 13

会場においては万全の対策が施されました。旅館組合でも徹底した対策が為され、移動・宿泊・食事といったプレー以外のところでの対策は十分為されたと言ってよいでしょう。

しかし高校生年代はすぐに気が緩んでしまいます。そのことは高校教師をしているのでわかります。「密になってるぞ」などと声をかけながら会場を巡回していました。

4) 競技者における「新たな様式」

ピッチ上では思う存分プレーしてもらいます。競技中の接触は問題ありません。ただし、スポーツ活動そのものではありませんが、たとえば試合前後の円陣や雄たけびの声を上げるのはNGです。円陣を組まなくても、雄たけびの声を上げなくても、内面から盛り上げるのが「新たな様式」だと考えます。その意味で、得点場面や勝利の瞬間の抱擁なども控えてほしいところであり、ここにも「新たな様式」を求めたいと考えます。

準決勝のマッチコーディネーションミーティング(MCM)では、主催者から改めてこのことをお願いしました。「モデルは1964年東京オリンピック柔道無差別級優勝のヘーシンクです」と。何のことかわかっていない様子だったので少し補足を。



オリンピック競技会で初めて採用された柔道の、無差別級のチャンピオンが、日本人ではなくオランダ人となりました。本人はもちろん、周囲のスタッフも大喜びのはずです。現にオランダのスタッフは喜びのあまり畳に駆け上がろうとしましたがそのとき、ヘーシンクは、自分のうれしい思いをぐっところえて、駆け上がろうとするスタッフを制したというエピソードです。とてつもなく大きな喜びを、とてつもなく大きな自制心で抑えることが「新たな様式」では求められるのかもしれませんが。そんな気持ちでこのエピソードを紹介しました。

5) 決勝戦そして閉会式

決勝戦は東京勢同士の対戦となりました。そして素晴らしい試合でペスカドーラ町田が初優勝。U-18 フットサルの先進地域である東京都にとっても初の栄冠でした。

しかし閉会式の時点でもまだ「よかった」と言い切れるほどの確信が持てないままでした。主催者挨拶では「おめでとう」「ありがとう」の前に、「まだ大会は終わっていない」趣旨のコメントをしました。

以下、大会報告書から一部引用します。

多くの方から「開いてくれてありがとう」と言ってもらえましたが、決勝戦が終わったあとも、まだ確信は持てませんでした。ほんとうに「新たな様式」は徹底できたのだろうか。また「新たな様式」と我々が思っている方法は、ほんとうに適切だったのだろうか…。見えない敵との戦いは、フットサルの試合よりはるかに難しいものです。閉会式の主催者挨拶では、そんな気持ちが頭の中にあっただので、「おめでとう」「ありがとう」より先に、開催判断の難しさと「まだ終わっていない」ことを述べました。「少なくとも家に帰って2週間は自己観察を続けてください。そこまでが大会です」と。さらに、「この大会で感じ、考えた“With コロナ”の新たな様式は、これからもずっと続けてください」と続けました。「新たな様式」は大会期間中だけでなく、普段から心がけ、実践していくもの。心からそう思います。

3. 大会を終えて

2 週間が経過し、すべての参加者の安全が確認されました。これでようやく大会終了です。ほっとしました。とにかくこの間、いろんなことを考えました。大会を開くべきかどうか。開く場合は、開かない場合は…。

「大会がないと選手がかわいそう」「3 年生の“最後のひのき舞台”を」の声をよく聞きます。気持ちはよくわかります。しかし、スポーツよりも大事なものは“いのち”です。いま為すべきことは、その観点から考えるべきです。また、そもそも大会があろうがなかろうが、好きなスポーツは「できるとき」にやればよいのです。アマチュアに“引退”はありません。

いまは「できるとき」なのか否か。そこの判断が難しいところでした。そして私たちは、「少しでも可能性があるならとことんやり切ろう」と考えました。

大事なものはその思いを、大会にかかわるすべての人が共有することです。主催者だけが思っているだけでもだめですし、指導者間で共有しているだけでも不十分です。すべてのプレーヤー、保護者、審判員、運営スタッフ、会場関係者、移動・宿泊・食事を含むあらゆる場面にかかわるすべての人が、思いを共有することが不可欠です。大会の主催者としてこだわったのはその部分でした。そして、覚悟と危機感を持ったうえで、それでも「やる！」と決め、やり切りました。

今大会でどこまでできたのでしょうか。こちらからはみえない部分もあるので本当のところはわかりません。しかしいずれにしても、「参加者自信が大会運営の担い手である」という考え方は、これからも残していきたいと思います。

今大会で用いたガイドラインを示します。コロナ禍でのイベント開催の参考にいただければ幸いです。

ただしガイドラインやマニュアルは、「つくる」のが目的ではありません。守らなければ意味がありません。

もっと言うと、書かれていることを「守る」のが目的だとするのもおかしな話です。書かれていないことが発生するかもしれないし、書かれたことを守ったとしても感染するときはあるのです。

感染しない、させない、不安にしない、させないことが大事なのであって、ガイドラインやマニュアルとにらめっこしていても仕方ありません。

信号と同じです。

以前、「赤信号、みんなで渡れば怖くない」というギャグがありましたが、その逆についてはどうでしょう。

「青信号、みんなで渡れば怖くない」となっているのでしょうか。

青信号でも、横から猛スピードで突っ込んでくる車があるかもしれません。だから青信号のときにもまわりをみなくてはなりません。事故にあわないことが大事なのであって、信号を守ることが目的なのではありません。

自分自身でまわりをみて状況を把握し、考え、行動するのは。このあたり前のことを忘れてはなりません。

サッカーやフットサルで常にやっているこのサイクルが、コロナ禍で忘れ、失いかけているのではないかと感じます。

まったくわからなかった段階では、何をしていたかわからないので、しかるべき機関が示してくれるガイドラインに沿ってものごとを判断するしかありませんでした（いまでもその要素はあります）。

しかしガイドラインにすべて書かれるわけがありません。自分自身でまわりをみて、考え、行動するのは。

大会を通して、またコロナ禍のさまざまな取り組みを通してこのようなことを考えました。

Ⅲ. 動画配信プロジェクトについて（田島璃子）

新型コロナ感染症の拡大を防止するため、多くのスポーツイベントが無観客での開催を余儀なくされています。サロン 2002 が主催する標記大会についても、無観客での実施は選ばざるを得ない選択でした。しかし観戦したい人が試合をリアルタイムで見られるようにしたいという思いも、同時にありました。高校 3 年生は節目の大

会となる場合もあり、保護者の方をはじめとし、需要は高いでしょう。そこで、対象を保護者とチーム関係者のみに限定し、zoom を用いた配信を行いました。配信の結果、映像の質について、またスタッフの連携についての問題が明らかになったほか、来年度以降の展望について、視聴者、コンテンツ、スタッフそれぞれについてより広い活動ができるのではないかと可能性が感じられる取り組みとなりました。

1. 配信の仕組み

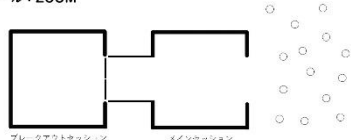
肖像権の保護を重視した本大会の配信は zoom を用いて保護者とチーム関係者に対象を限定して行いました。各チームには事前に視聴希望者の提出を求めて視聴登録とし、登録のない人は視聴できないシステムを整備しました。具体的にはすべての試合に別の zoom 会議を設定し一覧にして各チームに配布し、そのうえで関係するチームの試合に参加。Zoom のメインルーム（注1）で参加の名前を変更し、登録が確認できた場合は大会の様子を視聴できるブレイクアウトルーム（注2）にスタッフが誘導する、というものでした。

（注1） メインルーム オンライン会議ツール、zoom の中で参加者全員が入ることのできる設定の部屋

（注2） ブレイクアウトルーム オンライン会議ツール、zoom の中で主催者（ホスト）が参加者をいくつかのグループに振り分けることができ、そのグループの名称、参加者自身が参加するグループを選ぶことも、主催者（ホスト）が割り振ることもできるが、本大会の配信では校舎を利用。

配信方法

使用ツール：ZOOM



配信方法

使用ツール：ZOOM

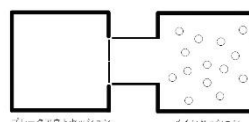


図1 参加者が zoom に参加する様子（イメージ図）

図2 参加者がメインルームにいる様子（イメージ図）



写真1 大会当日の配信の様子

1 試合当たり 10~30 名ほどが視聴し、入室時のトラブルも比較的少なく実施することができました。

コート 2 つ分をそれぞれ向かい側の観客席より撮影・配信し、可能な範囲で試合実況や得点の経過なども配信しました。配信はビデオカメラと iPad を使って撮影しました。

2. 配信の問題点

配信の問題点①画質・音質



音声もとぎれとぎれ

原因：通信環境の悪さ
（ポケットwifiが役に立たず）

対応：・配信画質を落とす
・文字情報を送る

対策：有線設置を依頼
（引き続き中継は実施）
画角、得点表示を再検討

配信に当たって、大きな問題は2点あり、1点目は画質と音質の悪さでした。原因は現地の通信環境の悪さであり、とぎれとぎれの音声と、背番号がやっと判別できるくらいの粗い動画となってしまいました。（左の資料の写真とはアングルが異なります。）当日は配信の画質を落とすことと、チャットを用いた文字情報を送ることで対応しましたが、来年度以降に向けては優先 LAN の整備を要望しました。またさらなる工夫として、画面上に得点や残り時間の表示をしたいと考えています。

2 点目の問題はスタッフの連携に関するものです。当日の主なスタッフのすべきことは視聴者の登録情報の確認とブレイクアウトルームへの誘導でした。本大会では、現地のスタッフ3名と、東京などのリモートスタッフ7

配信の問題点②スタッフの連携



現地スタッフ 3名+高校生、保護者
リモートスタッフ 7名

問題：休みがない、情報共有の速度

対策：スタッフ増員

理想：現地7名～
(zoom管理、撮影、実況、スタッフ管理)

名、そして現地の高校生と保護者の方のご協力により何とか配信できました。しかしリモートのスタッフの連携不足や休憩の少なさが問題となり、来年以降はより多くのスタッフの動員が必要であると考えています。

3. 今後の展望 「より『広い』配信を」

本大会の配信は外部委託などせず、主催者によって運営されたためいくらかの問題点がありましたが、それは同時に様々な

創意工夫によってより価値のある配信ができるということでもあります。来年以降の展望として、視聴者、コンテンツ、スタッフの3つの視点を「広く」することができると感じました。

(1) 広い視聴者に

2021年の大会では肖像権保護の観点から保護者とチーム関係者に対象を絞った配信を行いました。フットサルファンや関係者、大会参加者の友人などもっと広い対象に配信することができれば、配信の価値は変わってくるでしょう。そのためには早期からの準備が必須となり、肖像権の問題だけでなく、スポーツの瞬間を切り取ることへの問題や、審判や選手への誹謗中傷など様々なリスクを回避できるような整備が必要となります。

(2) 広いコンテンツを

本大会の配信は試合の配信のみに限りましたが、表彰式などの試合以外の部分の配信や、試合後の選手インタビューなど、配信だからこそできるコンテンツの企画も配信の価値を高める大きな可能性がある部分です。そのほかにも配信としての価値が上がるような、より細かな実況が付けられたら楽しんで視聴できる配信となります。また、現地にいるかのように視聴できる工夫として、試合を視聴する角度を視聴者が選択できたり、視聴者のスマホと連動して現地で声援がなったりなどの仕掛けも考えられます。

(3) 広いスタッフと

本大会では主にNPO サロン 2002 のメンバーがスタッフとなり配信を行いました。現地の高校生と連携することで、「大会を作る経験」としての価値が生まれるとともに、配信でできることの可能性が広がるでしょう。配信システムの考案、整備だけでなく、動画撮影や実況も、高校生の創意工夫によって型にとらわれない新しい発想が期待できます。また試合後のインタビューや写真の撮影などにも携わる機会を作ることができれば、大会を運営することの楽しさを知り、その後の人生でのフットサルのかかわり方、フットサル全体の盛り上げにさえ影響を与えうるのではないのでしょうか。

4. 配信を終えて 「大会を作る経験の意義とスポーツの力」

初めての試みであった本大会の配信は、準備段階も、当日も、陳腐な言葉にはなりますが、楽しいものでした。その配信の中で感じたことは、「大会を作る経験の意義はとても大きい」ということです。私自身の話をすると、フットサルやサッカーの経験は全くなく、その他のスポーツでも大きな大会に出るような選手ではありませんでした。ではなぜ本大会の配信に関わったのかというと、高校の部活動で自主大会を運営する経験をし、それがきっかけとなり、スポーツイベントへの興味が高まったからでした。来年以降の本大会が、高校生が主体となって大会運営に関わることができる場になると、スポーツを「する」「見る」だけでなく「支える」立場への関心が高まります。試合に出場する選手、応援する選手、マネージャーなどの高校生が、フットサル、またスポーツ全体への新たなかかわり方を見つける可能性を感じました。

スポーツの力は、非常に強く、あたたかいものです。同じスポーツを好きでいる人同士のつながりの深さ、一緒にスポーツをすることで生まれる人間関係の強さは、まぎれもなく生活をゆたかにし、時には生活を根底から支える唯一無二の存在となります。スポーツには、新型コロナの影響が人々のつながりを変えている現代において、人間関係の希薄化を食い止めることができる力があります。また人と会わない生活をする日々の中で、長野から東京のリモートスタッフと配信をし、スポーツの持つ可能性がいかに大きいかを身にしみて感じた大会でした。

このあと、21:00 までディスカッション。

終了後、23:30 までオンライン懇親会で盛り上がった。

オンライン懇親会にもすっかり慣れてきた。とても楽しい！

以上